

いちごの山下げ栽培

1. 試験のねらい

省力化及び炭そ病の回避を目的に、準高冷地に親株を上げて育苗し、子苗を下げて栽培する山下げ栽培が一部の産地で行われていることから、子苗の増殖本数と花芽分化状況及び山下げ時の苗の大きさが収量に及ぼす影響について検討した。

2. 試験方法

- (1) 子苗の増殖本数と花芽分化状況：親株を6月5日に日光市所野標高550mへ山上げし、畝間230cm、株間50cmに植え付けた。子苗の増殖本数及び子苗ごとの葉数、苗重、花芽分化状況を、9月2日と9月20日に調査した。
- (2) 山下げ時の苗の大きさが収量に及ぼす影響：山下げ時の苗の大きさは小苗（葉数2.4枚）、中苗（3.7枚）及び大苗（5.1枚）の3処理とした。山下げは9月20日に行い、畝間110cm、株間21cmの2条高畝に定植した。本ぼの施肥量はa当たりN：2.0、 P_2O_5 ：3.0、 K_2O ：2.0kgとした。

3. 試験結果および考察

- (1) 子苗の増殖本数と花芽分化状況：子苗の発生状況は9月2日で43本、9月20日には80本となった。子苗の花芽分化状況については、9月2日、9月20日の調査とも葉数が少ない苗ほど分化は遅く、葉数が多くなるにしたがって進む傾向にあった。
- (2) 山下げ時の苗の大きさが収量に及ぼす影響：花芽分化状況は中苗及び大苗がガク片初生期であったのに対し、小苗は花房分化期でやや遅れる傾向にあった。頂花房及び腋花房の開花始期は花芽分化と同様に、中苗と大苗は同時期であったのに対し小苗では4日遅かった。収穫始期は処理による差は認められなかった。総収量は大苗>中苗>小苗の順に多かった。

4. 成果の要約

山下げ栽培における子苗の増殖本数、花芽分化状況及び山下げ時の苗の大きさが収量に及ぼす影響について検討した結果、親株を6月上旬に山上げし、9月下旬に山下げする場合には子苗が80本前後発生し、葉数が多い大苗ほど花芽分化が進む傾向にあることが明らかとなった。また、大苗ほど収量が多いので、極端な小苗の使用を避けることが望ましいと思われた。

（担当者 栃木分場 大谷晴美※） ※現小山農業改良普及センター

表-1 葉数別の子苗数と花芽分化状況

葉数 (枚)	9月2日		9月20日	
	子苗数 (本)	花芽分化 指 数	子苗数 (本)	花芽分化 指 数
1.0~1.9	17	0.0	11	1.4
2.0~2.9	13	0.1	31	2.4
3.0~3.9	7	0.5	20	3.0
4.0~4.9	6	0.9	13	2.8
5.0~	0	—	5	4.2
合計	43	0.2	80	2.6

注. 葉数 1枚前後で、未発根の苗を除く

花芽分化指数は、0:未分化、1:分化、2:花房分化、3:ガク片初生、
4:ガク片形成、5:花卉形成、で算出した

表-2 山下げ時の苗の大きさと花芽分化状況

処 理 苗の大きさ	葉数 (枚)	苗重 (g)	葉柄長 (cm)	莖径 (mm)	花芽分化	
					指数	内生葉数
小 苗	2.4	3.3	5.8	5.7	1.9	3.4
中 苗	3.7	6.9	9.5	7.4	3.2	3.8
大 苗	5.1	16.9	13.9	8.7	3.1	4.4

表-3 苗の大きさが開花及び収穫始期、収量に及ぼす影響

処 理 苗の大きさ	開花始期(月. 日)		収穫始期 (月. 日)	時期別収量(g/株)					
	頂花房	腋花房		12月	1月	2月	3月	4月	合計
小 苗	11.18	12.14	12.28	11	112	136	140	112	511
中 苗	11.14	12.10	12.29	11	132	135	136	109	523
大 苗	11.14	12.10	12.30	18	170	130	113	163	594